魔王で吸血姫ですが勇者と旅をしています

本知そら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔王で吸血姫ですが勇者と旅をしています

【Ｎコード】
Ｎ８７９２Ｘ

【作者名】
本知そら

【あらすじ】
足を滑らせて学校の屋上から落下した僕『加志崎える』は、突如現れた『穴』に吸い込まれ、魂だけの姿となって異世界へと飛ばされる。消滅しかけていた僕を助けてくれたのは『リーデ』という少女。吸血鬼の国『カメリア』を統治する姫であり、隣国からは『魔王』と恐れられる『吸血姫』だった。彼女は僕の魂を自身に取り込むことによって僕を救ってくれた。感謝する僕に彼女は体の主導権を渡してこう言った。「私、一度で良いから旅行してみたかったのよ」。助けられた手前、彼女の願いを叶えることにした僕は付人の

『ティルラ』と共に旅に出る。その後、カメリアを出て最初に訪れた町で、僕は『打倒魔王』を掲げる『勇者』と出会い、あろう事か彼を弟子にしてしまう。これは『魔王』である僕を打ち倒すことを目標とする『勇者』を弟子にした僕が当てもなくぶらぶらと世界を旅する物語。……え？　これって僕やられちゃうわけ？　※主人公最強設定の性転換物です。

第1話　えるとリーデ　ｐａｒｔ１

どれだけの時間が過ぎたのだろう。数日のようにも思えるし、数分のようにも思える。

どんなに目を凝らしても自分の手すら見えない、黒以外の色が存在しない空間。僕はその中をふわふわと漂っていた。

……漂っていた？　いや、それも疑わしい。なんせ自分の手さえ見えないほどの漆黒の闇。あまりにも暗すぎて右も左も上も下も分からないんだから。地に足も付いていないし、平衡感覚なんてとうに失っている。

少しの気分の悪さと不安を抱えながら、じっとしたまま暗闇の中を漂う僕。

一応これでも最初の内はいろいろと試した。だがどれもこれも今の状況を打破するには至らなかった。むしろ不安を煽るだけだった。

それにしても、どうしてこんなことになったんだろう。僕はただ学校の屋上で足を滑らせて落ちただけなのに……。

って、全然『ただ』とか『だけ』で済まされることじゃないって！　屋上から落ちたんだよ！？　死にそうだったんだから！

一人でボケツッコミ。長いことここにいるせいで頭が回らなくなってきている。

少し冷静に考えよう。とりあえず、あのまま地面に激突していたら僕は間違いなく頭の中身を大衆にひけらかしてぽっくり逝ってしまわれていた（表現をマイルドにしてお送りしています）ので、今の状態はどちらかと言えばまだマシな方では？　もしあのまま地面にゴールインしていた場合、きっと学校の屋上の使用がＰＴＡで問題となり、せっかくの生徒の憩いの場である屋上が僕のせいで使用禁止になっていただろう。そうなるとそれは僕の歴代ワースト一位の黒歴史となり、みんなに合わせる顔がない僕は卒業するまでは家に引きこもり、それがずるずると続いて、果てはニートに……って、

その時は僕死んでるから考えるだけ無駄か。あっはっは……。
で、僕って今生きてるの？
質問に答えてくれる人がいるはずもなく、僕の問いかけは暗闇の中に解けて消えた。
屋上から落ちたあのとき、僕は迫り来る地面との衝撃を覚悟し、けれども自分の最期くらいはしっかりと目に焼き付けようと、意味のない意地を張って地面を凝視していた。すると突然目の前に黒い丸い穴のようなものが現れて、僕はそれに吸い込まれるようにして落ちてしまった。
そして現在に至るわけだけど……もしかしてさっきの穴に落ちる一連の流れは死ぬ間際に見た幻覚で、僕はすでに死んでいて、ここが死後の世界だとか？
そうだとすると……なんて味気ない世界なんだ。四方八方暗闇のこんな世界で、次の転生まで待てというのだろうか。あんまりだ。あんまりすぎる。せめて暇つぶしにテレビだとか本くらい置いててほしいものだ。
『あなた、よくそんなのんきなことが考えられるわね』
ふいに声が聞こえた。それは小さく微かなものだった。
どこからだろう。
辺りをキョロキョロと見回していると、再び声が聞こえる。
『こっちこっち』
遠くで何かが光った。小さな小さな点のような光だけど、それは暗闇の中にいた僕には酷く眩しかった。
『あなたは自分が今どこにいてどういう状況か分かってるの？』
「それがさっぱり。なんとなく死後の世界かなぁ～って考えてたところ」
声が出た。いや、出るかどうかなんて試してなかったけど。
『自分が死んでいるかもしれないのに、その落ち着き払った態度は呆れを通り越して尊敬すらするわね……』
光の強さが一瞬弱まった。なんとなく溜息をついているように見

えた。
「ところで見知らぬ人……人ですよね？」
『一応私は人間ね』
一応？　まあいいや。
「僕って死んでます？」
『半分死んで半分生きているってところかしら。今あなたは肉体を失い、魂だけになって、この世界をふわふわと浮いているだけの不安定な存在よ』
「ああ、幽体離脱ってやつですね」
『そう言われると酷く軽い感じがするのは何故かしら……』
そりゃ魂だけになったら重量的に言えばふわふわだと思う。
『そう言う意味じゃないわよ』
心を読まれた。この人実は神様じゃ？
『人間だってさっき言ったでしょ？』
人間。つまり超能力者というやつなのかな。そんな人とテレビ越し以外で初めて会ったよ。ごめんなさい。ずっと『胡散臭い』なんて思っててごめんなさい。『スプーンなんて曲げて何の役に立つの？』とか捻くれたこと考えてごめんなさい。
『いえそんなことはどうでもいいから……あなた早くしないと死ぬわよ？』
痺れを切らしたかのように唐突に突きつけられた余命宣告。いやまあ実際痺れを切らしたんだろうなあ。全然話進んでないし。
『あなたがそんなこと考えるから進まないのよ』
ごもっともです。でもそんなあなたも毎回僕に付き合うのがいけな――
『あなた死にたいの？』
「続きをどうぞ」
死にたくないので先を促す。
『時間がないから簡潔に話すわよ』
「できれば初めからじっくり聞きたいです」

『いっそのこと死ぬ？』
「ぜひ手短にお願いします」
なんか楽しくなってきた。死にかけてるらしいけど。
『次ふざけたら、それはイコール死だと思いなさい』
厳しめの口調だけど、きっと彼女は最後まで僕を見捨てることはないんだろうなあと思う。なんとなく。
『このままだとあなたは後数分足らずで間違いなく死ぬ。もしあなたが自殺志願者ならそのまま死ぬのも良し。もし生きたければ……』
光が強くなった。眩しさで目が眩む。
『その光に触れなさい』
視力を取り戻したときには、光は一筋の線になり、僕のすぐ傍にまで伸びてきていた。
もちろん僕は考える必要もなくその光に触れた。
光のはずなのに、何故かそれは暖かかった。
『あなた生きたかったのね』
「そりゃまあ、僕はまだ十六歳の取れ立てピチピチの高校生ですから」
『死にかけているのにピチピチなのね』
彼女がくすりと笑ったように思えた。
『でもいいの？　次に目が覚めたら犬になっているかもしれないわよ？』
彼女の言葉に少し驚く。たしかに彼女は『元の姿で』とは言っていなかった。
でも……と考える。
「それならそれで犬畜生になって旅にでも出て、自由の身を存分に楽しみますよ」
『旅ねぇ……。それもいいかもしれないわね』
「でしょう？」
『ふふ。まあ安心しなさい。ちゃんと人間にしてあげるから。ただ、元の姿、とはいかないけれど』

「常に前傾姿勢前向き思考の僕ならそれだけでオールオッケーです」
『そう。その言葉は本当？』
「はい」
どうせなくなっていた命だ。たとえ別人になって別の人生を歩むことになろうとも、生きていられる、それだけで十分儲けものだろう。
『後悔はしない？』
「はいっ」
力強く頷く。とは言っても彼女に見えているのかどうかは分からない。
『……分かったわ。じゃあ、少しの間我慢してね』
その声を合図に、光の線がぐるぐると僕を縛り始める。幾重にも重なった光の線が束となり、太い縄のようになると、僕をここから引きずり出すように強い力で引っ張られた。
感覚を失った僕でも感じるほどの強い衝撃を受けながら、少しずつ光の光源へと引っ張られていく。
その光は徐々に大きくなり、やがて僕を包み込むように全身を照らした。
その暖かい光に包まれながら、僕は意識を手放した。

第1話　えるとリーデ　part2

「んん……」
瞼越しに光を感じて目を覚ます。ぼやけた視界の先から暖かな光が降り注ぎ、優しげな風が頬を撫でる。
目を擦りながら上半身を起こし、背伸びをする。
あの暗闇の中を漂っていたせいだろうか。少し頭がクラクラする。船酔いに似た気持ち悪さを感じながらも、今の僕は機嫌が良かった。生まれ変わったというか、脱皮したというか、そんな清々しい気分だ。
……ん？
少しずつ鮮明になる視界に違和感を覚える。それを確認するため、ぐるりと辺りを見回す。
そこは見慣れない部屋だった。壁や床はキラキラと光沢を放つ石（大理石のようなものだろうか）で敷き詰められ、備え付けられた家具や調度品には異様に凝った細工が施されたものばかりが並んでいる。よく見ると今僕が座っているベッドも三、四人は寝られるんじゃないかと言うくらい大きく、天蓋まで付いた高級感の漂うものだった。
「な、なにこの中世ヨーロッパの貴族の寝室みたいな部屋は……？」
当然の疑問を一人呟く。
「やっと起きたのですか？　もうお昼ですよ？」
「ひゃっ！？」
誰もいないと思っていたところに突然声を掛けられ、心臓が飛び出そうなほどに驚く。反射的に声のした方を向くと、そこには少女が一人、僕に背を向けて立っていた。
彼女はカーテンを開き、大きな窓を開け放す。薔薇の良い香りが窓から流れ込んでくる。
「ほら、こんなに良い天気なのですから、久しぶりに散歩に出られ

てはどうですか？」
少女が振り返り、僕に微笑みかけながら言う。
「え、あ、う、うん……」
どう答えて良いか分からず、とりあえず頷いておく。
「？　どうしたのですか？　いつもと様子が違うようですが」
そんな僕の様子に怪訝な顔をする少女。
……えーと。誰？
失礼だとは思いつつも彼女を凝視する。
少女はフリルがたくさん付いた黒いワンピースにエプロンをした、所謂メイド服を身に纏っている。長い黒髪は後ろで結んでポニーテールにしており、彼女の動きに合わせて右へ左へと揺れている。身長は一六〇あるかないかと言ったところで、歳は十代中頃から後半、僕と同い年くらいに見える。
ここまでの説明で彼女の姿を想像すると、きっとそれは日常的に見慣れた生粋の日本人になるだろう。だが、金色の瞳が彼女を日本人ではないことを伝え、そして頭に生えた狐のような長い耳が彼女を『ただの人』ではないことを訴えていた。そして同時にその事実は、今僕がいる世界が元いた僕の世界とは違う世界だということを如実に現わしていた。
いやまあなんとなく分かってたよ？　あの神様みたいな女の子に助けられた辺りからなんとなくは。
部屋の内装、とりわけシャンデリアに立てられた蝋燭を見て、この世界が元の世界よりも文明が遅れていることを知る。
それで、今の僕は一体どういう状況？　この少女は何者？　口振りから僕のことを知っているようだけど、それはなぜ？
……だめだ。疑問符が頭に浮かびすぎて知恵熱出そう。
「そんなに私の顔をじっと見つめて、何かあったので――……ああ、そういえば昨日見知らぬ方と『同化』したのでしたね」
パンッと手を打ち鳴らす少女。また一つ疑問が増える。
「あなた様とはこれが初対面ということですね。それは失礼いたし

ました」
深々と頭を下げる。そしてゆっくりと顔を上げ、
「それでは自己紹介から。私は獣人のティルラ＝ホリー。リーデ様のお世話係です」
スカートを摘み上げ、上品に挨拶をするティルラさん。
お世話係……ってことは、これが噂のリアルメイドさん？
メイドさんなんて人を初めて見た僕は少なからず感動する。
こんな可愛い女の子がメイドだったら毎日楽しいだろうなあ、なんて下世話なことを考える。
ところでリーデ様って誰だろう？
「これからよろしくお願いします。リーデ様」
僕の心を読み取ったかのように、ティルラさんは僕に微笑みを向ける。
一応後ろを振り向く。もちろん誰もいない。
僕は自分を指差して、
「リーデ様って僕のこと？」
「はい。その通りです」
優しい笑みを浮かべたままのティルラさんがゆっくりと頷く。
……あれ？
僕は違和感に気付く。
「あー、あー」
やっぱりだ。声がおかしい。いつもより高くて女の子みたいな声だ。
気になって喉に手を当てると、あるはずのものがそこにはなかった。
……ん～～。あー、なるほど。何故僕がこんなところにいるのか、なんとなく分かってきた。
学校の屋上から落ちたその後、暗闇の中で死にそうになっているところを見知らぬ女の子に助けられた僕は、彼女によって元の自分ではない『リーデ様』となって生き返った。おそらくは『昨日まで

のリーデ様』が『同化』というものをしたせいでこうなったのだろう。
うん。なるほど。そういうことか。
つまり今の僕は……
「鏡、ご覧になりますか？」
「お、お願いします……」
ティルラさんが部屋の隅から大きな姿見を持ってくる。僕はざわつく胸を押さえながら姿見を見た。
そこには触り心地の良さそうなネグリジェを身に纏い、絹糸のような銀色の長い髪をベッドに扇状に広げた、まるでおとぎ話に出てくる妖精のような少女が映っていた。じっとこちらを見つめる瞳は宝石のような青色で、小さな唇は綺麗な桜色をしている。透き通るような白い肌はきめ細かく、頬は化粧でもしているかのようにほんのりと赤い。手足はほっそりとしていて、触れば壊れてしまいそうだ。
年の頃は十代前半といったところだろうか。ティルラさんよりも一回りも二回りも小柄で、見方によっては小学生に見えなくもない。実際胸も『ある』とは言い難い慎ましさだし。
……と、他人事のように観察してみたけど、これが今の僕の姿なんだよね。
「はあ……」
自然とため息が漏れる。
いくらなんでも以前の僕と違いすぎる。真逆と言っても良い。
「どうしたのですか？　ため息なんてついて」
「人生山あり谷ありと言いますが、これはちょっと乗り越えるのは至難だなあ、と」
ティルラさんが「ああ」と呟き、
「心中お察しします」
と眉尻を下げた。
ティルラさんが悲しんでくれるなんて思わなかった僕は慌ててし

んみりとした空気を打ち消そうとする。
「ま、まあ、あの時助けられていなかったら僕は死んでいたわけですから、それと比べると全然良い方ですよ。ちょっと以前の僕とは方向性が違うようですが、こんな可愛らしい女の子になれるのなら、これはこれで楽しいかもしれませんし」
出来るだけ明るく努めて言う。
『自分のことを可愛らしいって、ナルシストにも程があるわね……』
「！？」
暗闇の中で聞いた声を耳にする。頭の中で鳴り響くようなその声がどこから来ているのかと周囲を見回す。
けどティルラさんと僕以外そこには誰もいなかった。
「リーデ様おはようございます」
ティルラさんにもこの声が聞こえているのだろうか。でもどうして僕を見つめながら言うのだろう。しかも『リーデ様』って。
『おはようティルラ。今日も眠気を誘う良い天気ね』
「寝てばかりいると牛になりますよ？　今日は気持ちのいい風も吹いていますし、久しぶりに散歩なんていかがですか？」
『そうね……。この子が良いなら私は良いわよ』
「本当ですか！？」
ティルラさんが僕の手を取り目を輝かせる。
「ではさっそく着替えの用意を――」
「ち、ちょって待って！　この声は誰？　どうして頭の中から聞こえるの？　なんでティルラさんは僕の手を握ってるの？」
矢継ぎ早に質問をぶつけられたティルラさんが首を傾げる。僕の手は握ったままで。
「……もしかして、リーデ様から何も聞いていないのですか？」
リーデ様？　リーデ様って僕の事じゃ――
『何も話していないわよ。この子がどういう反応するのか見てみたかったから』
「はあ……。またリーデ様はそうやって人を振り回す……」

「ね、ねえ。あなたは僕を助けてくれた人ですよね？　どこにいるんですか？　姿が見えないんですけど」
クスッと笑い声が聞こえる。やっぱりそれも頭の中から聞こえた。
『どこって、あなたのすぐ傍よ』
周りを見る。やっぱり誰もいない。
『もっと近くよ』
もっと？　もっとってこれ以上近くは……ん？
ティルラさんと目が合う。ティルラさんはじっと僕を見つめていた。少しの微笑みを浮かべながら。
……まさか。
『そう。そこに私はいるわ』
あの時のように僕の心を読んだのだろう。この体の『本来の持ち主』であるリーデ様は嬉しそうだった。
そう。彼女は僕の中にいた。
『遅くなったけど自己紹介ね。私は吸血鬼のリーデ＝カメリア。この国を治める吸血姫（きゅうけつひめ）よ』
鏡の前の僕が意に反してにこりと微笑む。薄く開いた唇の間から、キラリと光る鋭い犬歯が見えた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8792x/

魔王で吸血姫ですが勇者と旅をしています

2011年10月25日01時01分発行